

東京図書館制覇！（<https://tokyo-toshokan.net/>）は、図書館好きの運営者が、東京23区の図書館・約250館を全て回った記録を綴っているサイトです。このひと八〇図書館は、そんな図書館巡りの活動のなかで見つけた、面白い図書館発行物をあつめた図書館です。

1

書名	『おおきなかぶ もじのない絵本』
著者／編者	ささきちあ／ゆめか／根本照／えいき／ちはっち／おおのかすみ／くろとりえいた
出版者	板橋区立成増図書館
解説	<p>板橋区立成増図書館では、読書週間に「みんなでつくろう！てづくりえほん」という企画を行い、名作絵本3作品をそれぞれ20場面に分け、子どもの参加者に1人1場面の絵を作成してもらい、それを繋ぎ合わせて世界に1つしかない絵本を作っています。2010（平成22）年からの毎年恒例企画で、これまでに作られた絵本は全28冊。これからも増えていくと思います。</p> <p>「物語を読む」だけでなく「物語を絵で描く」というのも楽しい読書体験です。図書館が中心となって、同じ図書館を使っている子どもの読書体験を繋げて、一つの絵本にするというのはとても素敵な企画です。私が知る限り、東京都内でこのような企画を定期的に行っているのは成増図書館だけですが、他の図書館にも広がって欲しいです。</p> <p>また、絵本として鑑賞すると、絵具がクレヨンと決まっているせいか、1枚1枚違う子どもが描いているにも関わらず、全体としてまとまりがある印象を受けるのが不思議で興味深いです。それでいて、同じ登場人物・舞台がそれぞれの子どもの頭の中で違う姿になっている、そんな多様性も見えてきます。</p>

2

書名	『中野交通ノスタルジィ PART 1』 『中野交通ノスタルジィ PART 2』
著者／編者	中野区立中央図書館
出版者	中野区
解説	<p>中野区立中央図書館の地域資料室には、大きな展示コーナーがあります（東久留米市立中央図書館2階の展示コーナーより少し小さいくらい）。2006年から2010年頃には、この展示コーナーを使って、図書館が中野に関するさまざまなテーマを深く調べ、その内容をまとめた展示をしていました。また、展示期間終了後には、展示内容を資料にまとめて蔵書にしていました。この資料は、そうやって蔵書になった資料の一つです。</p> <p>資料を見ると、図書館資料を使って調べたことだけでなく、東京メトロからお借りした写真や、個人の方からお借りした模型も合わせて、展示を作っていることがわかります。何かを調べる際、紙資料が中心の図書館だけでなく、図書館の外にある情報と掛け合わせることも大切です。この資料の内容は、まさにそれを示しています。</p> <p>この資料の存在は、企画展示を行うだけでなく、期間が終わった後に資料を残すことの重要も示しています。皆さんは、図書館で気になるイベントや展示があったのに、都合がつけられずに行けなかったという経験はないでしょうか。資料の保存を役割とする図書館ですので、自らの企画に関する資料保存も積極的に行って欲しいです。</p>

書名	『蘆花生誕百三十年記念講演会「芦花の偉大さ」』
著者／編者	出久根達郎・述
出版者	世田谷文学館
解説	<p>世田谷文学館で1998（平成10）年10月10日に行われた出久根達郎氏の講演の文字起こしです。出久根氏の許可を取って、世田谷文学館の文責において文字起こしした資料ですが、世田谷文学館ではこの資料を所蔵しておらず、世田谷区立粕谷図書館だけが所蔵しているという、珍しい資料です。</p> <p>私が世田谷文学館に問い合わせたときにご対応いただいた職員さんによると、「通常は講演の文字起こしはしません。なぜなら、後に講演内容を文字起こしすると、話せない・話しくらくなるが出てきます。また、講演内容を文字起こしする条件だと講演料も高くなります」とのこと。実際、講演会は多くの図書館で行われますが、その文字起こしをして資料として所蔵するケースは、私はこれしか知りません。</p> <p>また、ご対応いただいた職員さん自身も、この講演当時世田谷文学館に在籍していたが、私が問合せをするまでこの資料の存在を知らなかったそうです。</p> <p>この資料を所蔵している世田谷区立粕谷図書館は、徳富蘆花の旧宅を公園にした「蘆花恒春園」が近いため、蘆花の資料を集めた「徳富蘆花コーナー」があります。おそらく、そうした由来から、この講演を文字に起こして資料とすることを出久根氏にお願いし、許可していただいたものと思われます。</p> <p>資料としての珍しさとともに、蘆花の作品を読んだことがない人はきっと読みたくなる、読んだことがある人はきっと蘆花のことがもっと好きになる講演内容の面白さを楽しんでください。</p>

書名	『練馬ブックマップ 本のある暮らし』
著者／編者	練馬区立大泉図書館・練馬区立貫井図書館・練馬区立南田中図書館 編集
出版者	練馬区立大泉図書館・練馬区立貫井図書館・練馬区立南田中図書館
解説	<p>練馬区立図書館の中の3館が、練馬区内の図書館・書店・その他本が置いてある施設を調べ、マップ形式にまとめて紹介した資料です。現在は図書館資料として所蔵するのみですが、発行した当時は図書館で配布していました。</p> <p>図書館の場所を示すマップは、図書館ウェブサイトや図書館で配布している図書館案内などでみることができます。書店の場所も、地図アプリで「書店」と検索すれば、ある程度はわかるでしょう。では、図書館も書店も含めた「本に触れられる場所」のマップはどうでしょう。あまりないと思いますが、練馬区の3館が、実際に区内を回って取材し、マップにまとめました。</p> <p>書店は年々減る傾向にあります。ブックマップを見ると、鉄道駅を中心に本に触れることができる場所があるのがわかります。練馬区立図書館は、駅に近い館より駅から離れた住宅地にある館のほうが多く、書店と図書館を合わせた「本のある場所」の分布としてバランスもよいように感じます。従来の「書店」とは違ふかたちで本に触れられる場所もありますし、「本がある場所」としてすぐに思い浮かびにくい美術館などにも本があると気づかされます。</p> <p>資料としては、2013（平成25）年12月に発行した「練馬ブックマップ 本のある暮らし」と、2014（平成26）年10月に発行した「練馬ブックマップ 本のある暮らし Ver.2」があります（今回のひと八〇図書館用に用意していただいたのはVer.2）。それ以降は発行していないようですが、今また調べたらどう変わっているだろうということにも、興味がそそられます。</p>

書名	『びっと－地域と利用者と図書館と－』
著者／編者	東京都墨田区立八広図書館 「びっと」編集部
出版者	墨田区立八広図書館
解説	<p>皆さんは図書館が発行している「図書館だより」に、どんなイメージを持っていますか。図書館からのお知らせや、新着図書の紹介などが載っているもの、というのが、多くの人が持つイメージだと思います。そんなイメージを覆すのが、墨田区立八広図書館が1981（昭和56）年4月から2000（平成12）年3月まで発行していた「びっと」です。</p> <p>館長インタビューや投書箱に寄せられた意見が掲載された4ページの創刊号で始まった「びっと」は、回を重ねるたびに、利用者が作った詩、イラスト、漫画、本の感想、エッセイ、小説が掲載されるようになり、一番ページ数が多い第48号では何と68ページにも渡るほどボリュームのある冊子へと育っていきます。</p> <p>この当時館長を務めていた千葉治氏は、ご著書『本のある広場』で図書館のことを「本のある広場」と表現しており、この考え方に基づく八広図書館の在り方は全国の注目を集めました。図書館職員だけでなく、利用者も編集に参加し、図書館が利用者に知らせたいことだけでなく、利用者が皆に伝えたいこと、表現したいことを募って作られた「びっと」は、「本のある広場」という考えを体現しています。墨田区立図書館の書誌情報では、「びっと」のことを「八広図書館の地域コミュニティ誌」と説明していますが、まさにその通り。近年、コミュニティの場としての図書館に注目が集まっていますが、もっと前からそれを実現していた図書館が存在していたのです。</p> <p>また、単に投稿された作品を掲載するだけでなく、東京大空襲の体験が綴られた文章をまとめた別冊を発行するなど、地域の記憶を残す役割も果たしています。</p> <p>今回用意したのは、1981年4月発行の創刊号から1998年8月発行の第67号（通巻69号）を合冊したのですが、調べたところ、2000年3月に最終号となる第68号（通巻70号）を発行したようです。最終号を含めた合冊は、墨田区立ひきふね図書館の禁帯資料（館内閲覧のみで、貸出できない）になっています。</p>

書名	『出会い－墨田区立八広図書館開館十周年記念誌－』
著者／編者	墨田区立八広図書館 編
出版者	墨田区立八広図書館
解説	<p>前の資料『びっと－地域と利用者と図書館と－』を発行した墨田区立八広図書館が、開館十周年記念に発行した文集です。書き手は子どもから大人まで、図書館との関わり方も、「びっと」の常連投稿者から、近所の図書館として利用している人までさまざまです。</p> <p>実は、こうした図書館の文集自体は珍しくありません。特に、図書館でのボランティア活動が活発な図書館で、切りのいいタイミングに発行するケースが多いようです。そうした文集は、ボランティア活動の担い手や館長など、図書館に深く関わっている人の文章が中心となっていて、それはそれでその図書館固有のかけがえのない記録です。</p> <p>『出会い』はそうした文集とは違う趣があり、いろいろな立場の人が「私はこんな風に図書館を使っている」という文章を寄せています。寝ているときに（八広ではない）図書館に行った夢を見たという、とりとめのない文を書いている人もいて、寄稿の内容もかなり自由です。これを読むと、八広図書館館長・千葉治氏の「本のある広場」という概念のとおり、利用者一人一人が自分の居場所・皆の居場所として図書館を利用している様子が伝わってきます。</p>

書名	『もう一つのイソップ物語』
著者／編者	杉並区立中央図書館 編
出版者	杉並区立中央図書館
解説	<p>杉並区立中央図書館で実施した企画「もう一つのイソップ物語」に寄せられた作品を収録した資料です。</p> <p>この企画では、杉並区内在住・在学・在勤の中学生から18歳までの人を対象に、「イソップ物語を題材に、それを発展させて自由におはなしを作ってください」と募集し、22作品が寄せられました。</p> <p>募集要項が</p> <hr/> <p>もとの話を次の中から一つ選びます。</p> <p>①「セミとアリ」（日本では「アリとキリギリス」として知られている作品） ②「北風と太陽」 ③「金のたまごを生むメンドリ」 ④「ウサギとカメ」 ⑤ ①から④以外でもイソップの話であればかまいません。</p> <hr/> <p>となっていたので、冒頭の4つの話のどれかを選んでいる人が多いです。</p> <p>元の作品の「続き」をかいた作品、舞台を杉並に移した作品、登場人物の性格を変えた作品など、お馴染みの作品をどう発展させていくかは、人によってさまざま。皆の作品を読み、自分も書いてみたいと思う人も多いでしょう。</p>

書名	『照姫伝説』
著者／編者	下平拓哉
出版者	練馬区立南田中図書館
解説	<p>公共図書館は、地域の学校図書館支援の役割も担っています。その役割を果たすなかで、練馬区立南田中図書館は、練馬区で一番よく知られている伝説の「照姫伝説」に関する資料として、子ども向けのいい図書がないことに気付きました。そこで自ら、小学生向け教材として使える内容の資料を作ったのが、この『照姫伝説』です。著者の下平氏は、当時の南田中図書館の職員さんです。</p> <p>図書館にはレファレンス（調べもの相談）というサービスがあります。レファレンスサービスとしては、「大人向けにはこんな本がありますが、子ども向けのいい本は見つかりません」という回答でも間違いではありません。でも、それで終わらせず、地域の子どもの学習に必要な資料が存在しないことを受けて、資料を発行した南田中図書館の活動を見ると、図書館とは何か、あらためて考えさせられます。</p> <p>本がたくさんあって、それを借りることができるという公立図書館の姿は、全国どの自治体もほぼ共通です。でも、どんなサービスをどこまで行うか、細かい部分は図書館によって異なります。首長・自治体や図書館員の考え方だけでなく、税収規模や、住民側が図書館に何を求めているかなど、サービスの受け手側の姿も、その地域の図書館の在り方に反映されます。</p>

書名	『団地のあるまち 南田中団地周辺の記憶』
著者／編者	練馬区立南田中図書館「団地のあるまち」制作チーム 編
出版者	練馬区立南田中図書館
解説	<p>練馬区立南田中図書館が、地域を取材して作った資料です。対象である南田中団地の歴史だけでなく、団地ができる前から現在に至るまでの大きな流れや、団地の周辺の変化もまとめた内容になっています。</p> <p>この資料を発行した頃、南田中図書館は館内の地域資料コーナーに、比較的小さい、でも、職員さんが自ら足を運んで取材した地域の様子を展示するコーナーがありました。ここからは私の想像ですが、そうやって普段から地域を取材することで職員さんと地域の皆さんが顔馴染みになり、また、その様子を展示したことで図書館へ情報を寄せる人も出てきた。そんな地域と図書館の関わりの表れが、この『団地のあるまち』ではないかと思います。</p>

書名	『ミナミタナカ物語』
著者／編者	ミナミタナカ物語編纂室 編
出版者	練馬区立南田中図書館
解説	<p>練馬区立南田中図書館が、10代前後の参加者を対象に行った連続ワークショップ企画の内容や成果物をまとめた資料です。</p> <p>日程のなかでは、南田中地域のさまざまな顔を見るワークショップを行いました。具体的には、「サイコロを振って出た面に従って街を歩く」「まちの〈静けさ〉を聞く」「地域のお店へのインタビュー」などです。そして、それらを体験した上で、南田中を舞台にした物語を書きます。これが「ミナミタナカ物語」というワークショップの全貌です。</p> <p>今回用意したのは2016年版ですが、そのほかに2015年版もあり、それぞれその年の参加者の作品と、その年のイベントの様子が収録されています。</p>

書名	江戸川区立図書館 ティーンズ広報誌 抜粋
著者／編者	江戸川区立図書館YAサービス担当者会
出版者	江戸川区立図書館YAサービス担当者会
解説	<p>江戸川区立図書館のティーンズ向け広報誌（2011年から2012年までは「ぐるぐるぐる」というタイトル、2012年以降は「パタパタペーパー」というタイトル）のうち、高校生・大学生・専門学校生のユーススタッフが書籍編集者さんなどにインタビューして書いた記事が掲載されている号をまとめました。</p> <p>ユーススタッフが出した「小説家・漫画家さんにインタビューをしたい」というアイデアを、そのままでは予算的に不可能だったところ、担当編集者さんへのインタビューへ変えて実現させています。そこから不定期で、作家さんとは違う立場の方へのインタビューや、そこで繋がりができたご縁から図書館で漫画原画展を開催するなど、企画を発展させています。</p>

書名	江戸川区立東葛西図書館広報誌「東葛西PRESS」抜粋
著者／编者	江戸川区立東葛西図書館
出版者	江戸川区立東葛西図書館
解説	<p>江戸川区立東葛西図書館が発行していた「東葛西PRESS」のうち、「ゴロ合わせ書架」コーナーが掲載されている号をまとめました。</p> <p>この「ゴロ合わせ書架」コーナーは、文章の上手な東葛西図書館の職員さんが、日本十進分類法（映画に関する本が「778」など、図書の分類を表す数字で、図書館の蔵書の背ラベルに書いてあるあの数字です）の語呂合わせを織り込んだ自作の創作作品を掲載したコーナーです。</p> <p>ある号では無理矢理の語呂合わせ、また別の号でも無理矢理の語呂合わせ、と語呂合わせとしてはかなり苦しいものが多いのですが（笑）、分類記号を覚えて図書館を活用して欲しいという思いが伝わってきます。また、創作物の内容も、そのときどきの話題作をモチーフにしている面白いです。</p>

今回の「蔵書」のうち、1～10まではそれぞれの地域の図書館の蔵書になっており、所蔵している図書館に行けば閲覧できますし、その図書館の図書館カードを作れる人なら借りることもできます。在住地などの制限でカードが作れない図書館の蔵書も、相互貸借を活用することで、「練馬区の図書館の蔵書を、東久留米市立図書館で借りる」といったことができます。

11は、蔵書として所蔵していませんが、江戸川区立図書館各館のティーンズコーナーに行くと、最新号だけでなくバックナンバーも配布していることがあり、あれば自由にいただけます。

12は残念ながら江戸川区立東葛西図書館にもありません。図書館だよりは、図書館からのお知らせを伝えるための単なるPR配布物ではなく、それ自体もその図書館のその時代がわかる資料なので、全ての図書館で資料として保存してくれたらと願います。